

阿 字 観 の 研 究

大 野 俊 覧

序 文

阿字観の内の一つに五色阿字（青黄赤黒之次第）というのがある。その研究を始めたのは、高野山釈迦文院所蔵の「五色阿字」（宝暦三年、竜剛記）を借覧してからである。仏書解説大辞典を見ると、「性善（二六七六一一七六三）撰、延享元年写本、龍大研仏」とあり、高野山にこの写本があることには言及していなかった。幸い高野山大学図書館にも、宥厳写（明和五年）の「五色阿字」が一部あり（三宝院寄託）、その書写年代は龍剛写のものから十五年後ではあるが、内容は殆ど同じであることがわかった。次に龍剛写のものを写真版で紹介するが、更にそれを、宥厳筆のものと対照しつつ和文になおして述べておく。

なお、密教大辞典によると、性善が高野山へ来たのは「延享元年夏、高野山円通寺妙瑞の請によりて登山」したのであり、龍剛の写本と宥厳の写本の両方の奥書に見られるように、「五色阿字」が妙瑞に先ず伝授されたのはこの同じ延享元年であつた。密教大辞典における性善の著書紹介の中には、この五色阿字のことは書いてないが、五色阿字の伝授はおそらく高野山以外の地においてもなされたものと思う。龍大所蔵のものがどういう経路をたどつてそこへ至つたか私には不明であるが、それは高野山以外の地における五色阿字の流布の一証左と見てよいと思う。

なおまた、弘法大師の「声字実相義」に「また五色をもつて阿字等を書くを色の文字と名づく」とあるが、この文の出所と見られる大日経第三転字輪曼荼羅行品（大正一八、二三頁上）等を見



龍剛筆「五色阿字」(高野山釈迦文院蔵)

ても、これは阿の一字を五色をもつて書くことを説いているのではなく、ア、バ、ラ、カ、キヤ等の五字(梵字)をそれぞれ別の色で書くことを説いているのであり、大日経には性善撰のごとき五色阿字は説いていないのである。大日経疏巻第八(大正三九、六六三頁下)にも

復次作法時当觀此字(阿字)周匝光鬘從火而出、具備三色とあり、阿字に一色以上の色を配することを説く所があるが、これはその次の文によると(乱脱になつてゐるので、伝受の順に配列して示す)

本体黃白色、如閻浮金。其三昧画作赤色。傍二点黑色如劫災火。

となつており、阿字の本体を三色でもつて書くといふのではないことがわかる。

五色阿字の着想はいつ頃から始まつたものか、今の所不明で、おそらく性善をもつてその真の撰者となすべきではなからうか。

さて次に、龍剛写の五色阿字をのべる。

一、五色阿字（青黄赤黒之次第）

「青色に陰陽之二点あり。此の表裏はすなわち理智也。これすなわち東方発心本有之阿字也。表裏の二点は初め筆を下すは陰也手を上げるこれ陽也。右の角に至つて筆を反す。これより手を覆すはこれ陰也。此の陰陽は一阿之中の理陽智陰也。是れ地大之形也。この方形を本として、余の点これより生ず。此の地（図）大に自然に五点を具す。開いて五色を成ず。地大何ぞ青なる。此の地大もと空輪より生ず。更に空より生じて未だいくばくならざるが故に青色を改めず。問え。

互に具する深意知るべし。故に青色を東方発心とす。五形の時、東方は木、青色、日之初めて出ずるも一番の明相は青色也。次に黄色は南方。これにも表裏あり。此の陰陽之点、理智を表す。南方は修行也。火也。この点修行点（図）之白を横さまに之を書く。火大を黄色とするは、火は地大方形より生じて、未だいくばくならずして地の色を全うして火なり。故に黄色かさなれば赤色となる也。（図）赤色は西方也。これまた南方より遷り来たれば、南方火大の色を全うして西方敬愛の色とする弥陀愛染の赤色なる最も深意あり。故に

（図）此の点は羅字の豎の一点也（有嚴のたては豎の字也）。もつて西方となる也。みな因つて来たる処あり。故にみな表裏の二点（図）あり。黒色は北方陰之極、変ずべからざるが故に黒色なり（有嚴には不_レ所_レ変となつてゐる）。此の点の表裏如何となれば（図）也を、これを恒_レ達之画と号けて、涅槃点とす。誠に由あるか。（図）白色は中央也。白色は五色の元也。（有嚴のもととは本の字）。五色之中に余の四色これより起り、ここに収まる。故に此の点、四点の惣体を結べるかたち（漢字は図の通りの省字）也。これについて不審あり。異本に阿につくる（阿は図の如き梵字）。その意云何。四点は四仏四智なる故に四色也。四智四仏具すればその全体白色法界智の大日也。故に髻点なきは却つて深意あり。又余の四点はみな最初の（図）発心の方形より生ず。謂わく黄（図）は（図）此のかたちを（図）これまでは（図）也。（図）は（図）此のかたちの裏（有嚴はかたちでなく、点の字を用う）を見る也。此の（図）最初の点は別の意あり。赤色の（図）は（図）のかたち、黒（図）も（図）也。少しづつかたちの変るは白色の五色に成ることし。（図）も修行点の如く見るべし。初の方形の中に此の五大五智の義をそなえたり。衆生此の理、解し難

き故に、五色之阿（梵字）此の形を現す。最初の（図）此の点は識大の点也。五色は五大台識大金を包む。故に最初の一点を隠してこれを包む。甚だ深意あり。最初の少点に五智を具う。又此の阿（梵字）字方形なるは、すなわち最初の横の一点之方形のかたちを改めざる也。かくの如く表顯すれども解り難き故に、五大の真言アビラウンケン（梵字）を説いて大日経七巻とす。アビラのアにアーク（片仮名の所皆梵字）を説く。五点具足なり。五色を五字にのべ、五字をのべて摩多体文五十字門とし、五十字を開いて顯密人天乗教とし、すなわち八万四千之法門となるは、もと此の一字なり。此はこれ宗之源極、必ず隱密すべし云

延享元甲子九月二十四日夜以阿闍梨性善比丘御自筆本於真別処写之 妙瑞比丘一歳 以妙瑞律師御自筆之本倉卒謄写之于時宝曆三癸酉秋七月十二日於釈室 龍剛記

以上が龍剛書写の五色阿字であるが、宥嚴の五色阿字の写本の奥書を示すと

延享元甲子九月二十四日夜以阿闍梨性善比丘御自筆本於真別処写之 妙瑞

宝曆三年癸酉六月朔日以妙瑞比丘親書本写之 高野山小田

原大聖院現住 頼規

宝曆八戊寅七月二十四日賜阿闍梨大聖院頼規御自筆本写畢 随心院現住宥本

明和五戊子十二月十五日以阿闍梨耶随心院宥本御自筆本書畢 求寂 宥嚴

とある。妙瑞までは両者全同である。前者の「釈室」は「釈迦文院」のことである。

次に、五色阿字の図の中の白色の部分、文中の解説では「鬚点」と書いているが、これは漢和字典によれば「アウ」で、鶯の俗字とあり、これを現代かなづかいの方法によつて「オウ」と発音するとすれば、右の白色の部分の図形は「オウ」点ではなく、「ウ」点でなければならぬ。惟謹の梵漢両字の配当表（大正一八・一九四頁中）によれば「ウ」は鳩字となつてゐる。右の鬚字も「ウ」字のつもりで書いたのではなからうか。然し、阿字を途中まで書いて、それに図の白の部分を「ウ」の点として書き足すということは、少々無理である。兎に角、阿の一字を色々な角度から分析して、このような観法の次第や理論を作成したということは、一驚に値する。このことは、阿字観を遮情門の観法とせずして、表徳門

の観法とする立場から起因したと思える。阿字は否定の原理でなく、大肯定の原理であると見、そこから、このような五色阿字の考え方も生じたものと言ひ得る。

母音の「ウ」点については、堀田真快師の「梵習字鑒」(高野山高等学校刊)には塙の字が配当してある。図の白の部分を「オウ」と見る場合、「オウ」点をはなさず一か所に付けて書くことにも無理があるし、漢字の配当も惟謹のは汚に、堀田猊下のは奥になつてゐるので、共に「オウ」の発音でこの写本の鷲字を読むことは無理であると思ふ。

二、阿字方形の事

五色阿字の基本になつてゐるのは阿字の方形である。この阿字の方形が実恵大徳(七八五—八四七)以降の阿字観において、如何に扱われているかにつき、いまは実恵大徳の絵尾口決と、恵照の阿字絵尾授要鈔、阿字絵尾禅策等について述べてみようと思ふ。

実恵大徳の「阿字観用心口決」(大正七七・四一五頁下)に

「阿字形如_レ常書形、廻四方可_レ有也。常書是一方計也。

上下無_二其形。一切梵字形四方事、以_二阿字_一可_レ准_二知之_一」

とあるが、ここの所を恵照の「阿字絵尾授要鈔」(延宝二年作)によると

「疏十六云、觀_二此字_一、當作_二方形_一。然_二此字形体亦方也_一」(下卷六丁左)

とあり、又同じく恵照の「阿字絵尾禅策」(延宝五年作)によると、同じように疏の十六の文を引いた後

「即行者、舉体全是_二方形_一、阿字、性相有_レ之。此觀時、行者之從_二左右腰_一至_二兩肩_一、其形体即_二方形也_一。頭即阿字、点形也。疏十二云、觀_二字、点_一為_二行者頭_一、余為_二身分_一、四支_一文。今言_二阿字、方形_一者、即是也。但阿字如_レ此顯_二方形相_一、方形常住不動、性相_一為_レ物、不被_二移轉_一。是故阿字本有常住性、即顯_二此形_一也」

とある。行者の舉体全くこれ阿字の方形と観すべきことを説き、又、特に観法時の坐相における、左右の腰から兩肩の線に見られる方形に阿字を観すべきことを強調したのは実恵大徳以降の所伝における一貫した流れと見てよいと思う。なお、行者の頭を点と見ることにについては、アン字観の流れが感じられる。アン字観と阿字観の関連については、本誌第八〇号に断片的乍ら言及してみた通りである。そのアン字観の場合においても、行者の首から下の四支において阿字の方形

を觀ぜしめるのである。五色阿字の場合、この方形から阿字の字体も転成したと見るのである。

三、むすび

性善の五色阿字により、その五色と五方等を配当すれば

色	五方	五転	五大	五行	五仏
青	東	発心	地	木	——
黄	南	修行	火	——	——
赤	西	敬愛 (愛染)	——	——	弥陀
黒	北	涅槃	——	——	——
白	中央	——	——	——	大日
色	五方	五大	五行	五仏	——
青	東	空	木	阿闍	——
赤	南	火	火	宝生	——
黒	西	風	金	弥陀	——
白	北	水	水	釈迦	——
黄	中央	地	土	大日	——

となる。不空本有の伝による五仏・五智・五方の配当図は

である（森田竜徳師著「即身成仏の観行」八九頁）が、性善は不空、善無畏その他いずれの配当方法によつたか、不明である。

なお、この五色阿字には陰陽の思想がある。陰を智に配し、陽を理に当てる。この考え方も他の阿字観の伝には見受けぬ所である。阿の一字の構成の途次において、一点一画に陰陽を見出す考え方は無類である。

最後に性善の略歴と著書について、密教大辞典により触れておく。

性善 東大寺戒壇真言阿院長老。字は洞泉。壮歳醍醐山に学び宝順の法を受く。悉曇を賢隆に学ぶ。当代における事相の達匠。高野山で報恩院流の伝授を行なう。光明台院の長老となる。著作は、卷数を別にして名目のみをあげれば、右辞典にあるもののみで四十八部。その著作は殆ど事相に関するもので、悉曇に関する著作もこの内十二部も含まれている。

四、道範と印融

——道範の文書を中心に——

南山(高野山)無量光院に住した印融(一四三五—一五一九)

は道範の学風が好きであつたらしく、「阿字観・道範御状案」

「阿吽合観・首竹」等の印融直筆の写本が現に釈迦文院(高

野山)に保存されている(首竹とは道範のことである)。道範の

阿字観を「表徳為レ表、遮情為レ裏」と評し、融源の阿字観を

「遮情為レ表、表徳為レ裏」と見たのも印融である(雷密雲編

秘決集 四六頁、樺尾上人
記「阿字観」の奥書参照)。

道範(一一八四—一二五二)は覚海門下の四哲の一人として

有名であるが、又、禪林寺静遍より理智事の三点説を継承

したものとして注目すべき存在である。道範の学風の根底に

は、この三点説の出所たる醍醐教学の絶対以本思想が流れ

ている。法然の成覚を説じ、本有の横証を顕すことを欣ぶの

は醍醐の立場である。そこでは遮情道迷の而二門的色彩は忌

避されるのである。(樺尾祥雲博士著「秘密仏教史」参照)。

次に、先ず道範の文書と思われるものをかかげる

「如実知自心事

凡就_ニ如実知自心_ニ有_ニ三姿_一。一、建立安心_ニ、建立立行_ニ也。

先建立_ニ立安心_ニ者、無_ニ思慮分別_一、無念無心_ニ、念_ニ如実知自

心_一。從_ニ一念_一、我相_ニ妄想分別_一、念々相統_ニ、云_ニ顛倒心_一、云_ニ不真

実心_一。二、約行_ニ建立者_一、我等衆生此四大和合_ニ、假身_ニ思我_一、

遍_ニ六塵_一、依_ニ住_ニ傍字_一、移_ニ往_ニ往_ニ、意思_ニ我心_一、依_ニ着相_一、忘_ニ本性

無念_一。起_ニ我他彼此相_一、自心切切_ニ、成_ニ取合_一、建立_ニ成_ニ三_ニ息

字_一、相入_ニ姿見_一、無_ニ思慮分別_一。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

息_一、建立_ニ自心_ニ云也。

如_レ此領解_ニ、息出_ニ声_ニ云_ニ実相_一也。仍_ニ出息_ニ以為_ニ釈迦_一、為_ニ諸

仏_一。以_ニ入息_ニ名_ニ弥陀_一也。前五識_ニ為_ニ成所作智_一、第六識_ニ為_ニ妙

觀察智_一。十方衆生平等受_ニ此_ニ息_一、故云_ニ平等性智_一也。問云、前

五識_ニ為_ニ成所作智_一、第六識_ニ云_ニ妙觀察智_一。如何。答云、言語

成_ニ音事_一皆_ニ出息_ニ功能_一也。六識分別_ニ功能_ニ智_一(知_ニの字傍記_一さる)。

以_ニ声顯故_一、成_ニ智_ニ體_一。故云_ニ外用諸仏_一、名_ニ成所作智_一也。

又_ニ出息_ニ來也_一。入_ニ息_ニ迎也_一。故云_ニ自來迎_一。又_ニ入息_ニ定_ニ、出息_ニ慮

也。定慮_ニ不_ニ二_ニ相_一、兼_ニ内証外用_一。故以_ニ此_ニ息_ニ云_ニ命_一。即名_ニ

無量壽_一。

凡_ニ息_ニ本風_一也。風_ニ無_ニ形_ニ地水火風依_ニ體_一、遍_ニ法界_一、施_ニ德_一。

此風_ニ、体常住_ニ不_ニ變_一、不_ニ失_ニ壞劫_一。故此息_ニ出入_ニ弥陀_一、口中阿

弥陀道場也。如此領解_ニ、云_ニ往生_一也。自他分別_ニ、念相_ニ、南無阿

弥陀仏息 帰三法界。後無念 是云極樂一也。

問云、此事幽玄事也。然而息云南無アミダブ（以下三字梵字）。南無所願アミタ也。是云法然自覺真言一也。一切衆生父母也。父母者阿母、吽父也。母唱レ阿父唱レ吽生故、衆生南無生也。此息開レ口阿出入、閉レ口吽出入。出息阿出、入息吽入ル。此云不動愛染。Ere 二字（共に梵字）此云暖動類、云有識含情。此阿吽南無也。南無即無量壽仏也。仍一仏二明王習、此事也。所詮如実知自心可意得様開レ南天鉄塔、龍猛菩薩金剛サタ問上曰、何菩提心。菩提心如実知自心。如実知自心者、自知阿字。知阿字者如何。本不生理也。本不生理者、云空無性理也。空無性理者云何汝神也。汝神者如何。己心也。己心者云出入息。出入息者如何。知云菩提心、云即身成仏也。息止云空。是常住不變、空一切不失也。以之為三仏体。弥陀根本Ere（梵字）也。一切物不三障礙一息也。

弘法大師御詠

今はや後世乃勤もせさりけり、阿吽二字の息にまかせて

淨菩提心如意宝朱満レ世出世勝希願除レ疑究竟獲三昧。自利他自レ是生也。

問、如実知自心之意如何。答、大師二字義云、問如実知自心如何耶。答、阿字本不生故、知自心本不生、謂之知自心也。問、阿字本不生故、何云如実知自心。答、阿字本不生之理云実。此本不生、理為自心性故也。問、本不生、者心性都無故云本不生、歟。將当雖有自心性、無變易故云本不生、歟。答、非謂自心性都無。自性清淨、無改性故云本不生、文。故疏云、実相者即是無相、菩提亦名一切智、文是也。問若尔者如実知自心時、凡夫業感、貪等転、即為果仏歟。又不尔歟、如何。若云転者与願乘、何異歟。若云不転者、生仏何異耶。答、大師云、知名仏、不知名衆生。云於法之体、性仏性德故、不論転捨一矣。故異願乘、又如実知自心不如実知自心故、生仏自異一矣。不如実知自心者、論云、無始懸隔是也。問、凡聖、貪等無差別者、諸仏又可レ行欲事乎。答、不尔。諸仏○如実知自心故、増三途業之例、長者宅中雖有、毒藥、知運用、方便愛用故無失。窮子宅中、毒藥不知、方便一故害其身一矣。

於高野山金剛峯寺清淨心院北坊大師堂 令書写畢

天文十肆歷、六月上旬

為師長同朋蠢動含靈增平仏徳也

伝灯権大僧都賢海^ニ申請作

上州勤息権大僧都慶弼

天文十七年^{戊申}三月二十一日書了

右筆英範

(以上の文のうち、阿吽の二字は梵漢両字が混用されているが、今は漢字のみ用いて書いた。又、返り点は原文のままでは読みにくいのを補足して書いた)。

右は道範手記の「阿字観用心口決・松尾伝・実恵親教」の再写本(堀田真快猊下所蔵)に併記されている文である。

この「如実知自心事」の項の次に併記されている「臨終用心事・道範」の項を、大日本仏教全書所載の彼の「臨終用心事」(「秘密念仏鈔」・「巻下」参照)と比較するに、後者の文章の方が長行ではあるが、欠けていない所の文章は、両者殆ど同一である。それによつて前文の「如実知自心事」の文も、恐らく道範手記のものに違いないと推定できるのである。尚、阿吽合観・弥陀念仏の信仰等の内容からも、この文の道範作たることは疑をゆるさざる所と思う。

所で、道範の文と印融の考え方とに、どこらに共通点があるか、次に少し述べてみよう。

「凡染欲心与^ニ真実患者^一十識平等果位法門。全非^ニ因分^一。周遍法界^ニ阿字大空染^一。大染欲^ニ尔^一是遠離因果上法門也。清浄本覺妙法懸^ニ目暫染欲心云也^一(印融記「阿字観」口決・西院流方)。これは高野山大学図書館に後人の写本——奥書は印融の直筆文の通りで、書写した後人の名と、書写の年月なし——のものと、高野山釈迦文院所蔵の印融直筆のものとがあり、前者の虫食いで不明の部分を後者の直筆の文書と対照しつつ書いた。

「大欲自成^ニ大染智^一菩提大欲満因^ニ成^一大悲種^ニ所以大欲大樂不空身為^ニ理趣會^一」(印融記「兩部受茶羅私鈔上」高野山大学図書館蔵)

これらの印融(一四三五—一五一九)の遠離因果の法門、清浄本覺の立場は、染欲の大肯定の立場であり、道範の右の「如実知自心事」に見られる「於^ニ法之体^一性仏性徳故不^レ論^ニ転捨^一」その他「凡聖貪等無差別」等の立場は、本有表徳の立場に属し、欲心大肯定の思想に外ならぬのである。この事は、印融も三會寺賢継によつて醍醐流の淵玄を究めている事に鑑みても、むべなるかなと思ひあたるのである(梅尾上人或は融源の阿字観における「無相観行最勝」、「悦^ニ生^一歡^ニ死^一皆悉妄念」、「唯早^ニ抛^一万事一心可^ニ観行^一」、「断^ニ妄念散乱心^一」等の遮情遣迷的な考え方と比較すれば、道範の考え方は対照的であることがわかる。尚、雷密雲編「阿字観秘決集」にあ

る梅尾上人記「阿字観」と、高大同書館蔵の五智房融源の阿字観の写本——貴重圖書・大永八年の奥書あるもの、及びその他——とを比較すれば殆ど同一である。

梅尾明恵上人は一一七三—一二三二の年代の人であり、融源は覺鑒上人の弟子で、上人四十九才にして示寂せし際（一四三）、その棺側に侍したという（大山公淳博士著「密教史」概説と教理「五六二頁」）から、明恵上人より融源の方が数十年前以前の生れである。この両者のいずれが相似の阿字観の眞の撰者であるか、雷密雲が「此阿字観或為明恵上人作。或為五智房作。無由決是非也」

と右「阿字観秘決集」（四十六頁）にいうように不明である。

阿字観においては、阿字、蓮花、月輪の三者を観想の対象とし、それぞれの具有する諸徳に参入しようとする。阿字の法尔能加持の徳（大日經百字成就持誦品）、月輪の自性清淨離貪欲垢、清涼去瞋恚熱、光明照愚癡暗の三徳（實恵「阿字観」用心口決）、蓮華の清淨不染の徳（大日經疏第十二、大正三九・七〇六頁中）等の諸徳を自己に現成しようとして、積極的に情念を集中するこの観法は、明らかに遮情的ではなく、表徳的立場である。これは不立文字を標榜する禪

家の遮情的立場と比較すれば容易に首肯できる。この阿字観の表徳的立場の中に、印融は更に表徳為表者と遮情為表者の両者を区別するのである。

〔追記〕 この五色阿字は立川流五色阿字（密教大辭典中卷一五五八頁中段参照）の影響を受けていると思われるが、この点の研究については後時にゆずる。